

震災見舞い御礼

このたびの東日本大震災に際し、皆様からたくさんのお電話・FAX・メールをいただきありがとうございました。

励ましのお言葉、心のこもった救援物資また義援金までお届けいただきお礼の言葉もありません。厚く御礼申し上げます。社員一同頑張っております。(写真は、わが町の光景です)



「東日本大震災」

三月一日金曜日午後二時四六分、重低音の不気味な地鳴りとともに大地震はやって来た。

事務所には、鈴木、伊東女史、妻それに週一回孫を連れて仕事にくる娘とわたしの六人がいた。

激しい揺れだ。

『机の下にもぐれ』

和室の方に目をやると、激しく泣く孫(生後一〇ヶ月)を抱きかかえたまま妻は身を伏せている。

わたしは、机の下で飛び出しそうなき出しを押しさえながらもう止むだろうと高を括っていた。

しかし、揺れは収まるどころか更に激しさを増してきた。

孫のところにいきたくても、激しい揺れが許さない。やがて何分が経過したのだろう。やっと、大地震は遠のいていった。

次にやってくるのは、津波だ。

わたしの自宅は、国道六号を挟んで海岸線から五〇〇メートルも無い。交差点を渡りながら、いつも考えていた。津波がきたら・・・と。

『大震災の一日』

妻は、母の安否と民生委員の役目もあるからと私の制止を振り切って車で自宅に向かった。

大津波は、現実のものとしてやってきた。隣のおばあさんを助けようとした妻は、津波の水圧で足を挟まれ身動きが取れなくなった。胸まで浸かりながらガラスを割って脱出したが、九死に一生の出来事だった。

やがて、従業員の山野辺も新妻も無事客先から戻ってきた。第一原発に納品に行った息子だけが連絡が取れなかった。

自宅まで三キロほどの国道は、押し流されてきた無数の車と家屋の残骸それに漁船が横たわる惨状で、車は通れない。

自転車で自宅に向かったが、津波の警戒で近寄れず、やっと夕方戻ることが出来た。母はわたしを待っていた。無事だった。

息子は、第一原発の六号国道入り口で遭遇した。国道を迂回しながら五時間掛かって無事帰ってきた。町は暗闇の中だった。

あとがき



四倉港内に在った危険物倉庫は、写真の通り基礎部分だけを残し大津波に跡形も無くもって行かれてしまいました。

また、従業員の新妻君のお父さんは港に係留してあった持ち船を見に行き、そのまま行方不明になってしまった。彼とご家族のため、無事にそして一日も早く見つかることを願っております。